へそ薬師

金沢文庫駅近くの谷津という所に『太寧寺』というお寺があります。

御本尊様の薬師如来様は『へそ薬師』とも呼ばれていますが、けっしてそのお顔が『おへそ』に似ていたからではありません。

では、どうして、こんな変わった名前がついたのでしょうか？

今から８００年ほど前、この村にたった一人で暮らしている娘がいました。裏の畑でできるほんの少しの野菜と、村人の手伝いでもらう、僅かなお金で暮らしていました。

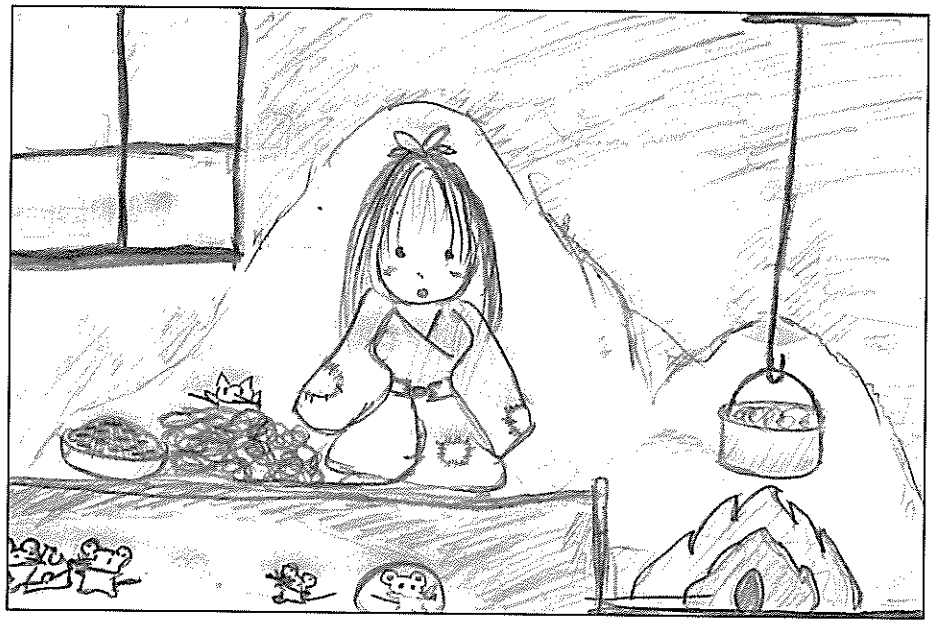
両親の命日が近いある年のことです。仏壇へ供える物と言えば、裏の畑にあるお芋だけ。お金もなく、お坊様にお経を頼むこともできません。命日なのに両親に何も出来ないことが悲しくて、その夜、ぼんやりと月を見上げていると、ポタリと涙がこぼれました。しばらくして娘はふっと亡くなった母親が残してくれた麻糸の束が一つある事を思い出しました。・・・そうだ、あれをつむいで『へそ』にして売れば、そのお金でお線香が買える。お坊様にお経を頼むこともできる・・・と思い、すぐに麻糸の束を取り出して、一晩中寝ないで沢山の『へそ』を作りました。

（『へそ』と言うのは、紡いだ麻糸をつなぎ、「はた織り機」にかけやすいように、輪の形に幾重にも巻いて、おへそのような形にした糸玉のことです。）

次の日、娘は『へそ』を売りに行きました。

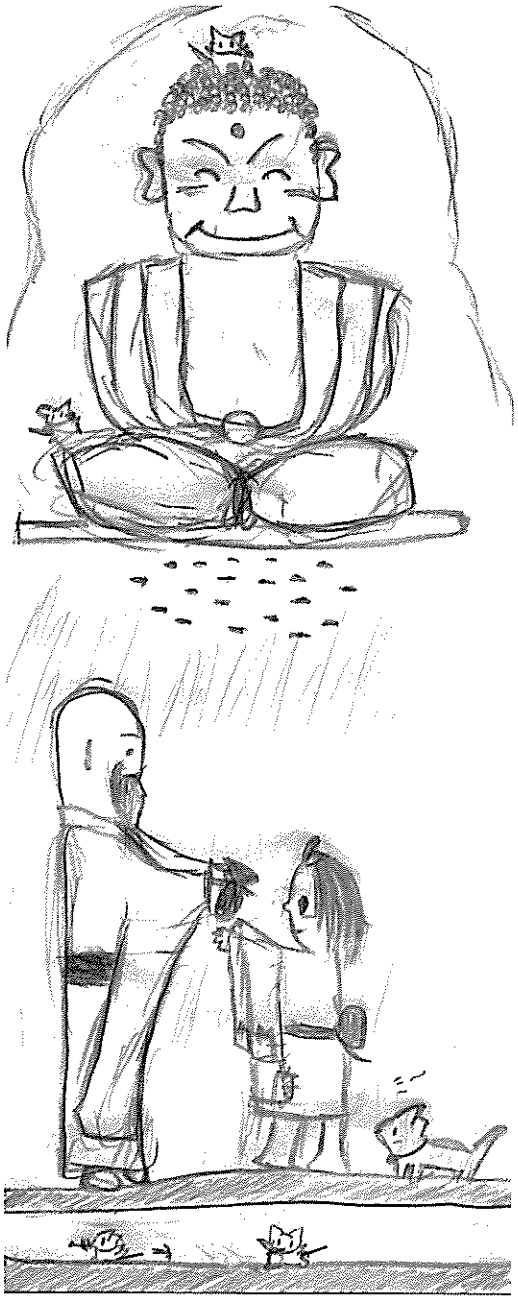
恥ずかしいのを我慢して、大きな声で売り歩きましたが、買い手はなく次の日もその次の日も足が棒になるくらい歩きましたが「へそ」は一つも売れず、とうとう命日は明日になってしまいました。娘は心の中で両親に謝りながら日暮れの道をトボトボと家の前まで来た時、後ろからだれかに声をかけられました。

振り返ると、この辺りでは見たことのない男の子でした。



「お母さんから『へそ』を買って来るようにいわれました。どうか、それを売ってください。」と言って、娘の持っていた『へそ』を全部買ってくれました。「ありがとう、これで命日のお供え物を買うことができる。だけどあなたはあまり見かけないけれどどこに住んでいるの？」と言うと、男の子は「すぐ近くに住んでいます。」と言い、『へそ』をかかえ、夕暮れの中へ消えてしまいました。娘はあまりの嬉しさに夢ではないかと思いましたが、手のひらにはちゃんと金貨がありました。早速、線香や両親の好きだった、お供え物を買いましたが、何となくさっきの男の子の事が気になったので、お寺に行ってお坊様に話しました。

話を聞いたお坊様は、娘を本堂の御本尊様の所へ連れて行きました。娘は御本尊様の前に、さっき、自分が男の子に売った『へそ』があるのを見て、大変驚きました。「昼間はここに『へそ』はなかったが、ついさっき見たら沢山おいてあるので、不思議なこともあるもんじゃと思っておったが、今お前さんの話をきいてよくわかった。これはきっと、お前さんの親孝行を見ていた御本尊様が、男の子の姿になって、お前さんから買ったのじゃろう。御本尊様はいつも、空から一生懸命生きている人を見ていて、困っていると助けてくれるんじゃ。この『へそ』は持って返ってお前さんの着物を作りなさい。」と、お坊様はいいました。「御本尊様、お坊様、本当にありがとうございました。」娘は、うれし涙を流して、心からお礼を言いました。それからのこと、村人達は、この御本尊様を『へそ薬師』と呼ぶようになったそうです。



文　氏家　總子（ふさこ）

絵　佐々木　怜奈（れいな）